

---

# 中尉の放課後

有村ユカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

中尉の放課後

### 【ZPDF】

Z0357A

### 【作者名】

有村ユカ

### 【あらすじ】

主旨がずれてきた二人だが（有村も…）、ジャンが来ててくれたお陰でなんとかその場を逃れたりザのハラハラ話

ピストルを抜かれたロイは腰を抜かしていく、とても立てる状態ではなかつた。

灰になつたロイをしり目に、リザはそそくさと帰り支度をしていた。  
『大佐。』ジャンは小声でロイの耳元でひそひそ話しかけていた。  
『ホークアイ中尉を怒らせないようにして下さいよ、大佐。』そう言つとジャンは、帰り支度をしているリザを横目でチラリと見た。ロイはジャンの声を聞く氣力もなかつた。（こんなにヤバイ奴だつたか…？）ロイは心中で呟いた。司令室にはリザとロイの二人だけ。

ロイは半びくびくしながら書類を小分けしている。

一方リザは、自分のやりかけの仕事をしていた。

『中尉。もうその仕事は明日でいいぞ。こんなに遅くまでここにいると帰りの夜道が危険だ。』心配そうにロイはリザに言つてみせた。リザはきつ、と睨み返し意地らしく笑つた。『これは大佐の責任です。部下の仕事を増やして、挙げ句の果てにこんな夜中まで勤務させることは。』呆ながら答えるリザに対し、ロイはむつ、とした表情で言い放つた。『…だからもつ帰つて良いと言つているだろ？…』だんだんキしかけてきたロイに、リザはつん、としながら答えた。  
『か弱い女性にこの夜道を一人で歩かせる氣ですか？』ロイはすかねず『…どこがか弱い女性か。

『口には出さずに心の中で突つ込んだ。

『私なら鍊金術で相手を焼き払えるからいいが、君はピストル。近距離になつたらまずいだろ？

『なんとか遠回しに言つうが、売り言葉に買い言葉、なかなか抗論が止まないので先にリザが止めた。

『…私が言いたいのはそつゆう「」とじやないんですよ…。』バンッと机を叩いてロイに言つた。

『じゃあ何が言いたいんだね、君は。

『怒りを抑えながらリザに問うた。

しかし、意外なまでの返答にロイは一瞬たじろいてしまった。

『……え……？』『だから、大佐と一緒に帰りたいって言つてるんですけど！何回も同じこと言わせないで下さいよっ！』それだけ言い放つたリザはふいつゝとそっぽを向いた。

ロイは何が起きたのか理解できなかつたが、リザの後ろ姿を見てやつと解つた。リザの耳は真つ赤に紅潮しきつっていたからだ。

ロイはふつゝと微かに笑い、リザの所まで歩いた。

リザは気配に気付き振り向こうとしたが、ロイの力で無理矢理振り向かされた。

『つちよつと大…！』ぐつゝと腕を引っ張られ、勢いよくロイの胸に引き寄せられた。

『……大佐っ。

『動かそうとしてもぴくりとも動かない。

リザは急に恥ずかしくなつてきた。

『…た、大佐っ！離してください』言ひきる前にロイはリザの口を塞いだ。

リザは一瞬何が起こつたのか分からなかつたが、すぐキスをされているのが解つた。

『…つー』喋るうとするリザの唇を無理矢理舌でじりあけ、リザの舌を絡ませ喋れないようにした。

『…！…ふつ…ん。

『絡ませる度にリザの口から漏れる声。

だんだん頭が回らないようになつてきたリザの体を、ロイは片方の手で首筋から肩、腕、クビレ。

ゆっくりと小鳥を撫でるかのように這わしていく。リザは身体中から寒気のようなものを感じた。

このままではまずい。

なんとか振りきろうとする腕をロイは軽く交わす。

リザはだんだん足に力が入らなくなってきた。『（ここまでは大佐の思うつぼ……）』心中で思つていたリザに、ロイは止めをさすようにリザのシャツに手を滑らせた。

『……ふつん……』びっくりして漏らした声に、ロイはしめしめと思いながらどんどんエスカレートしていく。

リザの胸のところまできたとたん……コンコン、とドアを叩く音が。二人とも動きを止め、距離を離した。

『入れ。』ロイはそう言つてドアの外の人物に言つた。ガチャ、とドアが開き、そこにはジャンが立つていた。リザは心からほつ、と胸をなで下ろした。『……あれ、まだ残つてたんスか？ ホークアイ中尉。』きょとんとした顔で聞かれたりザは、いつもの顔で答えた。『大佐が書類を片付けるまで待つていたんです。それに私の仕事も残つていたので。』りんとした口調で言つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0357a/>

---

中尉の放課後

2010年10月10日13時37分発行